原田牧場 Note

page 22

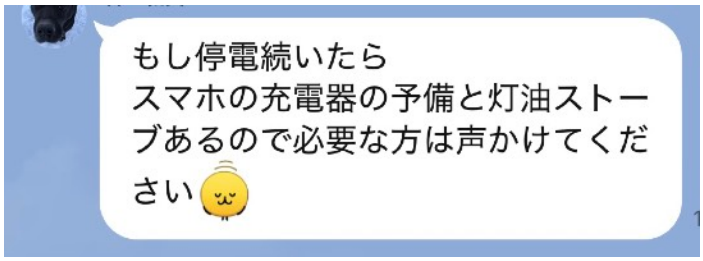
　前号休載してしまい、季節はずれになりますが、北海道の吹雪を語りたいと思います。暮らしに欠かせないマイカーの夏タイヤを冬タイヤに履き替えるのが11月。冬タイヤ→夏タイヤは5月の連休が終ってから。となると6ヶ月間は「冬」。お盆を過ぎると朝晩過ごしやすくなり、日が短くなったなあと感じた時には秋は終わっていて、あぁもう冬か、とため息。日が短いと気分が落ち込む人が増えると聞きますが、まさに実感します。「今年はどんな冬かなあ」「去年は吹雪は少なかったけど、災害級だったね…」と雪の話題が増えます。忘れられない吹雪の記憶が全員にあります。天災だから、しゃーない！と、誰に文句を言うこともなく、なんとかしのいだ作業の数々。
みんな同じ苦労をしているので、深くうなづいて「ねー」で通じるところ、北海道で暮らす者の、大きな連帯感に気持ちが救われること度々です。
　さて酪農家は、吹雪となると早朝3時くらいからショベルカーで除雪を始めたいのですが、まず家のドアが開かない、なんとかして外へ。目も開けられない暴風の中、吹き溜まりの雪が腰まであるような場所を越えてショベルカーへ。朝5時の搾乳までに敷地内の除雪を進めないと、餌も配れない、牛乳集荷のローリーも入って来られない。除雪しながらもどんどん雪は降ってきますが、ほっておくとショベルで押していくのも困難になるので、果てしないですが、やるしかない！暴風＝停電がつきもの。朝、電気がつけば、早めに牛舎へ行って搾乳を始めます。人員ひとりは除雪にとられ、搾乳パートさんは来られず、の状況で一人で搾乳を始めることもあります。電気が通っている間は、ミルクタンクも規定の温度が保たれ、品質は落ちません。外は荒れ狂っていてもそれだけは安心できます。牛さんは特にザワザワすることもなく、今日は搾乳が早いなあ、とのんびりモード…助かる！

途中で停電になると、D型ハウスから発電機を出すことになります。前もって出しやすい場所に置いていても、そこへ行くための除雪、扉が開かない、が追加で始まります。搾乳は一旦中断。搾り途中だった牛さんは、モーっ！とありったけの大声で文句を言います、当然です。ごめんごめんと言いながら1～２時間待つ時もあります。搾乳室で立っているのが辛抱ならず横になる牛さんもいます。発電機はトラクターに接続しエンジンをかけて

動かすタイプ、車輪付きで牛舎が何棟もある場合にも対応できます。発電機が回れば、搾乳再開。（あとは牛乳集荷が来られるかだなあ）と心配しながらもどんどん搾っていきます。時間経過とともに乳が張るので病気にならないためにも迅速に。

搾乳が終わったら少しホッとできますが、すぐ夕方の餌作り。吹雪の中、機械に乗ってやります。サイロ周りの除雪をしながらの作業です。いつもより遅くなってもミルクローリーが来てくれました！発電機のおかげできちんと牛乳が冷えていることを確認して集荷してもらいます。そして16時には2回目の搾乳があります。とにかく牛さんの体調と牛乳の品質を最優先に作業して気がついたら、朝の３時から夜の21時まで働いているのが吹雪の日の通常です。さて、発電機なしの自宅。明るい時間に一旦帰り、カセットコンロ、懐中電灯、非常用ライト、着替える服を配置します。去年12月の吹雪では36時間停電。暖房も切れ、上下ダウンの冬山キャンプの格好で過ごしました。寒いおかげで冷蔵庫の中の物もだいたい大丈夫でした。オール電化の温水器に溜まったお湯が少し使えるため、顔を拭いたりもできました。ガスが使える母家はご飯を炊いたり魚を焼いたりできたので、牧場スタッフちゃんも呼んで暗い中でみんなでご飯を食べました。発電機が回ってる間、牛舎に行けば携帯の充電は出来ます。牛舎に休憩室が完備されてる牧場は、そこでご飯をたいて食べたと言う話も聞きました。36時間の停電中に搾乳は3回やっています。正直だいぶと牛くさい（笑）

と、渦中は静まり返っていた酪農婦人部のグループラインが「お風呂に入りたすぎる〜」と動き始めました。励まし合って気分を保ちたくなる頃です。「ほくでんさん、まだかなあ」「電線工事の車のライトが見えたよ」



「えっ！期待しちゃう」ストーブ貸します！のラインに心が温まりました。

「隣町の温泉が吹雪でも営業してるよ」との情報でみんな元気が出てきました。家でも仕事でもずっと寒いのだから、心底あったまりたい。お風呂に入れると知れただけで、気力がわきました。

2018年９月６日胆振東部地震で大停電（ブラックアウト）が発生し、3日間電気が使えませんでした。我が家はすでに発電機がありましたが、

北海道には39の乳業工場があるが、大規模停電でよつ葉乳業（札幌市）の十勝主管工場（北海道音更町）とオホーツク北見工場（紋別市）を除いて操業がストップした。行き先を失った生乳約2万3千トン（23億円相当）が廃棄され、搾乳できない乳牛が乳房炎にかかった。苦い教訓を糧に、酪農家では自家発電機の導入が急速に進む。

まだ備えがなかった農家では搾乳できなかった牛が病気になったり、乳業メーカーにも大規模な発電機がなく、牛乳の受け入れ自体がストップ。

３日分の牛乳を廃棄することになってしまいました。この経験から、農家は自費で何百万円もする発電機を備え、乳業メーカーも非常用発電機を導入しました。忘れられない嫌な出来事でしたが、困難に耐えて切り抜ける力がついたのは確か。12月は吹雪と寒さと停電、倒木で電話線まで切れ、農協との連絡用FAXもネットも不通になる大惨事。年末年始くらいはゆっくりNetflixを楽しもう！と思っていたのも打ち砕かれたけど、無事やり抜きました。

筆者　　原田　希
1973年　大阪府吹田市生まれ
2006年　酪農家との結婚を機に北海道標茶町へ
2017年　北海道農業士に認定　北海道指導農業士の夫とともに新規就農者の支援を担当